

## ことば雑感

ひとりごととは「聞く相手がいないのに、ひとりでものを言うこと」であるらしい。もちろん本コーナーの「ひとりごと」がレトリックであることは承知しているが、どうしても読み手を意識してしまい、実際のひとりごとのように自由にはいかないもどかしさを覚えてしまう。そこでとりあえず「ひとりごと」を自分の考えや気持ちを整理するつやきと勝手に仮定し、その貴重な機会を与えられたものとプラスに考えることにした。

年末年始、久しぶりに帰省して実家を訪れると、父(77)の周りがこれまで全くの無縁であった漢字に関する書籍で溢れていた。父は研究者でも読書家でもない。そんな人が説文解字にはじまり諸氏の専門書まで買い揃えていた。「どうした?」と戸惑う息子に対して「漢字には目に見えない力が宿っている」「新しい漢字を創ろうと思ってな」「少しの金と時間があるから勉強してるんだハハハ」…と。そんな父の様子が契機となってその後息子はいくつかの「ひとりごと」をつぶやいた。

- (1) 「好きこそ物の上手なれ」とは先人の知恵の結晶。勉強でもスポーツでも対象への愛情に勝るものはない。新たなことに挑戦したり、既に完成したものを壊してやり直したりする力が身に付き、年齢に関係なく成長し続けることができる。目の前の子ども達に「好き」という思いを…あと自分自身にも。
- (2) 中島敦の短編「文字禍」にある文字の霊の一節を思い出す。「一つの文字を長く見詰めている中に、何時しかその文字が解体して、意味の無い一つ一つの交錯としか見えなくなって来る。単なる線の集まりが、何故、そういう音とそういう意味とを有つことが出来るのか、どうしても解らなくなってくる。」まさにゲシュタルト崩壊!板書の際、急に漢字が出てこなくなって焦るのも、父が漢字にとりつかれたのもこの「文字の霊」の仕業にしておこう。
- (3) 漢字(文字)を手書きする機会が少なくなった。年賀状もパソコンで作成されるようになって久しい。そんな中、手書きの年賀状に出遭うと、言葉そのものの温かさとその人ならではの筆跡とが相まって「ほっこり」させられる。「ほ」のつくオノマトペ「ほのぼの」「ほんわか」「ほかほか」…などはみな心温まるいい言葉だと思うが、今のところ「ほっこり」がしっくりくる。そういえば、私のひとりごとにはこのオノマトペの類が多いような気がする。何とも言い難い状況や心情を抽象化して整理してくれる便利グッズだ。

(F・S)